

# あしよろ・ハードサポート通信

朝晩はまだまだ気温が下がりますが、町内は順調に雪解けが進んでいます。日が長く、暖かくなると乳牛の調子も上がり、乳量が伸びてきたり、発情が見つけやすくなったりし始めます。

## ◆ 繁殖管理トピックス

2月は営農部の渡邊係長を講師に繁殖勉強会を開催し、青年部世代を中心に、男女合わせて30名近くが集まりました。発情兆候やAIタイミングなどの基本から始まり、ホルモンプログラム、遺伝改良、実際の授精業務といった多岐に渡る内容から、改めて繁殖管理について再認識できたのではないかと思います。授精師目線からの話題は、とても参考になりました。

## ◆ 乳量に反応が見えるまでのタイムラグ

繁殖成績が良くなると、生乳生産、乳牛の健康度アップ、コストの面など経営全体の効率がとても高まります。ですが、取り組み始めてもすぐには成果が見えづらく、のちに妊娠牛が増えても乳量に反応が見えるまでには時間がかかるため、酪農家さんが途中で飽きてしまったり、あきらめたりするケースもあるように感じています。

左は、ある酪農場の乳検成績です。

移動 13ヵ月 成績	牛 群 構 成							検定 乳量
	経産牛	搾乳牛	搾乳 日数	搾乳 日数	頭数	初産	雌	
検定月日			率	日数	頭数			
3. 9	59	48	91	258	1			27.5
4. 14	59	47	84	252	8	5	3	26.6
5. 11	62	52	86	221	6	1	2	28.7
6. 14	62	55	89	238	1			30.0
7. 13	61	53	88	247	6	2	3	25.3
8. 11	63	51	88	229	4		1	26.7
9. 10	63	52	82	231	2			24.9
10. 11	64	47	78	219	8	3	3	25.2
11. 11	64	52	81	208	5	1	1	25.1
12. 11	60	48	83	192	6	3	1	27.6
1. 13	63	52	83	189	7	1	1	28.3
2. 13	64	51	83	178	3	1	2	29.3
3. 6	65	50	82	179	1		1	29.9
平均・計	61.2	51.2	84	222	57	17	17	27.1
前年成績	61.5	53.8	87	241	46	7	23	25.3

分娩間隔 400~420 日を達成していれば、搾乳日数は 170~180 日程度で推移しますが、ここではそれまで繁殖管理に手こずって、牛群の搾乳日数が 200 日を超えていました。

前年から繁殖管理改善に取り組み、10月以降ようやく分娩頭数が増え、搾乳日数が縮まっていくと、それに比例して個体乳量が伸びてきているのがわかります。今後も分娩予定牛が控えているので、さらなる乳量が見込めるのではないのでしょうか。

今、がんばっている繁殖成績の取り組みの成果は、およそ1年のタイムラグを経てこのように経営に生産アップをもたらしてくれます。根気よく取り組んでもらえたらと思いますし、ここまでたどり着いたら、翌年の成績を狙って再び繁殖管理に力を入れることができるようになります。

### ◆ 繁殖成績アップの壁

発情がこない、とまらない、というのは多くの酪農家さんの悩みです。色々な要素が良好な繁殖成績のカギになりますが、特に分娩前後の飼養管理と、栄養管理や肢蹄管理が重要だと考えています。

## 発情がこない、とまらない

- 無発情・無排卵
- 卵胞嚢腫、黄体嚢腫
- 卵巣静止
- 子宮内膜炎

}

- 分娩異常(難産など)
- 周産期疾病(低カル、ケトosis、四変)
- 栄養不足(粗飼料品質、給与量不足)
- 乳房炎
- 肢蹄が痛い
- 過密、暑熱などのストレス
- 見逃し
- 授精のタイミングが合っていない
- 授精の手技に問題がある

→→ 飼養管理にエラーがある

17

みなさんの酪農場で足を引っ張っているのはどの部分でしょうか？

繁殖成績改善は手ごわいテーマですが、乗り越えると、酪農経営に大きなメリットをもたらします。様々な指標がありますが、身近な乳検成績での分娩間隔 400~420 日、牛群の妊娠牛頭数割合 50%以上を第一段の目標に、根気よくチャレンジしていただきたいです。  
(久富聡子)



2、3月もバルク乳でのアルコール反応を注意喚起した事例がいくつかありました。生乳とアルコールを1：1で混ぜて反応が出ると、その生乳は出荷できなくなってしまいます。極端に冷え込んだ数日間の翌週や、個体では分娩後の乳牛に反応が目立ちました。原因は解明されていませんが、長期的な栄養不足が影響しているのでは？と考えています。

冬期の事例の共通点は、牧草主体の飼養体系でした。昨年産の牧草は、残念ながら嗜好性や栄養価が低い傾向です。栄養不足気味でなんとか冬を越し、これから分娩を迎える乳牛は要注意かもしれません。配合飼料や圧ペントウモロコシなどのデンプン源飼料の増給で、効率よくエネルギー補給を狙っていただけたらと思います。